

老いのよそおい Vol. 2

The Preparations for Ageing Vol.2

佐藤 完
Tamotsu Satou
織田 紀代子
Kiyoko Oda
長岡 さとみ
Satomi Nagaoka

(要 約)

人間は、必ず死を迎える生き物である。明解な事実であるが、老いを生きる高齢者にとっては避けたい事でもある。お釈迦さまが言われたように私たちは、死ぬ身を生きているのである。介護に係わる人材養成を行っている私たちは、人の生きた証としての終末期を次の世代に紡ぐ視座を模索している。社会福祉法人高田真善会・特別養護老人ホーム報徳園園長の千草は、「生まれた時にその人の死ぬ時は、約束されている」と語る。報徳園では、亡くなると本人の身近な人たちが集い、御院さんによる「枕経」が営まれる。遺族の都合に合わせ、利用者及び職員一同で「お別勤め」を行い、正面玄関より合掌・礼拝を受け見送られる。報徳園に暮らす一人ひとりにとって真に「終の棲家」となっている。一身田寺内町近隣地区における住民の生活に関する意識調査を通して老いのよそおいについて概観する。

はじめに

津市一身田には、真宗高田派本山が存在する。真宗高田派本山では、お七夜報恩講をはじめ多くの年中行事が行われている。高田派の教えでは、阿弥陀如来は、あらゆる者を浄土に救うという大きな誓いをたて、われら凡夫（ぼんぶ）にはこの誓いを信じ念仏を申すことが浄土に生まれる因（たね）になると勧めてくれるという。

宗教とは人に死や生の意味を考えさせることを役割としてきたのではないか。広井¹が「戦前の日本人ないし現在の50～60代以上の高齢者の方々の世代は、何と言っても伝統的な（例えば『死んだら土に還る』といった感覚を含めて）『仏教的』といって大方差し支えないような、無意識のうちの暗黙の『死』についての了解があり、それが日本人に『共有』されたひとつの感覚にもなっていた。」と述べていることから伺える。一方、若い世代の人たちはどうであろう。日本人が無宗教であるといわれるようになったのは、戦後になってからである。特に高度経済成長期以降、戦前に対する反動ということもあり、死は片隅に追いやりられ経済成長期においては、生の充実、物質的な富の拡大という事に価値観や発想が移り、それが一種の宗教のようなものとして機能したといわれている²。今回、真宗高田派本山のある一身田寺内町近隣地区の住民が本山とどのような関わりをもちながら生活をしてきたのか、また生活をしているのか、普段の生活の中で影響を受けていることがあるのか等の意識調査を通し、老いのよそおいについて概観したことを報告する。

1. 調査結果（調査方法は、質問紙によるアンケート調査を実施）

1) 属性（表 1・2、図 1）

対象者は男性56名、女性65名で、平均年齢は63.9歳であった。年齢区分は20歳代1名（0.8%）、30歳代4名（3.3%）、40歳代6名（5.0%）、50歳代14名（11.6%）、60歳代31名（25.6%）、70歳代42名（34.7%）、80歳代22名（18.2%）、90歳代1名（0.8%）であった。住んでいる地域は、イ. 住宅地が107名（88.4%）、ロ. 商業地7名（5.8%）、ハ. 農耕地4名（3.3%）であった。

表 1 性別

	度数	パーセント
女	65	53.7
男	56	46.3
合計	121	100.0

表 2 年代別

	度数	パーセント
20歳代（20－29歳）	1	.8
30歳代（30－39歳）	4	3.3
40歳代（40－49歳）	6	5.0
50歳代（50－59歳）	14	11.6
60歳代（60－69歳）	31	25.6
70歳代（70－79歳）	42	34.7
80歳代（80－89歳）	22	18.2
90歳代（90歳以上）	1	.8
合計	121	100.0

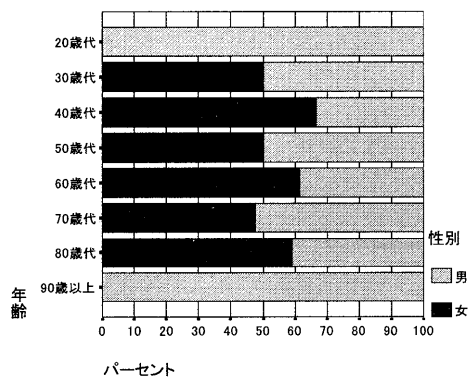


図 1 性別・年代別

2) アンケート結果

「一身田のお七夜を知っていますか」は20歳代の1名以外は全員が知っている（図2）。「お七夜は本山にお参りしますか」は91.7%がイ.（1回以上は参る）と答えている（図3）。「これからお七夜にお参りしますか」では67.8%がイ.（行きたい）、23.1%がロ.（都合がつく限り行きたい）と答えた（図4）。「お七夜でお説教を聞いたことがありますか」では56.2%がイ.（ある）と答え、38.8%はロ.（ない）であった。30歳代はイ.25%、ロ.75%、40歳代はイ.33.3%、ロ.66.7%、50歳代はイ.35.7%、ロ.64.3%とお七夜で説教を聞いたことがない対象者の方が多かった。60歳代はイ.58.1%、ロ.41.9%、70歳代はイ.59.5%、ロ.33.3%、80歳代はイ.77.3%、ロ.18.2%、90歳代もイ.と聞いたことがある対象者の方が多かった（図5）。「お説教の内容は理解できますか」では、イ.（できる）37.2%、ロ.（少しわかる）26.4%が半数以上を占めていた（図6）。「お七夜のお説教をこれからも聞きに行きますか」では、イ.（体が自由なあいだは行きたい）37.2%、ロ.（人に誘われたら行く）15.7%、ハ.（家事都合により行けない）9.9%、ニ.（知り合いに合えるから）0.8%、ホ.（聞きに行く気はない）13.2%、であった（図7）。

老いのよそおい Vol. 2

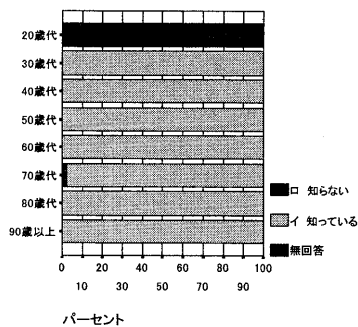


図 2 年齢別

「お七夜を知っているか」

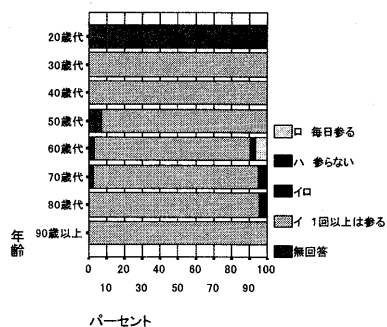


図 3 年齢別

「お七夜は本山にお参りするか」

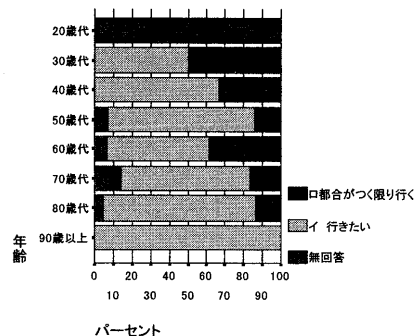


図 4 年齢別

「これからもお七夜にお参りするか」

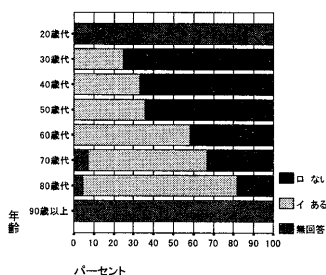


図 5 年齢別

「お七夜でお説教を聞いたことがあるか」

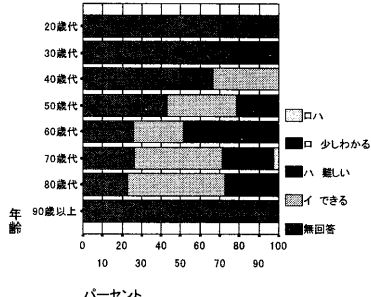


図 6 年齢別

「お説教の内容は理解できるか」

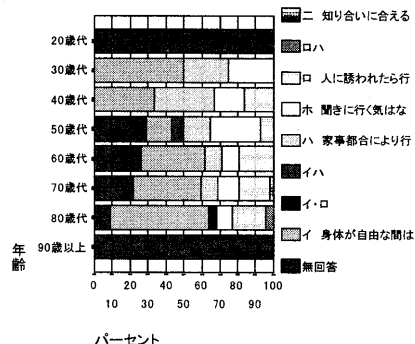


図 7 年齢別

「お七夜のお説教をこれからも聞きに行くか」

「自分の菩提寺にお参りに行きますか」では、73.6%がイ.(する)、14.9%がロ.(しない)と答えている。20歳代はロ、30歳代は、イ、ロ共に50.0%、40歳代はイ.66.7%、ロ.16.7%、50歳代は、イ.64.3%、ロ.28.6%、60歳代はイ.80.6%、ロ.12.9%、70歳代はイ.76.2%、ロ.7.1%、80歳代は、イ.72.7%、ロ.13.6%、90歳代の1名はイであった。30歳代から90歳代までどの年代も50%以上が行くと答えている(図8)。「菩提寺でお説教を聞いたことがありますか」では、54.5%がイ.(ある)、35.5%はロ.(ない)と答えている。20歳代はロ、30歳代はイ.25.0%、ロ.75.0%、40歳代、50歳代はイ、ロ共に50.0%、60歳代はイ.54.8%、ロ.35.5%、70歳代はイ.57.1%、ロ.26.2%、80歳代はイ.59.1%、ロ.31.8%、90歳代はイあるであった。20歳代、30歳代は聞いたことがないほうが多かった。40歳代、50歳代は同数であった。60歳代から90歳代では聞いたことがあるほうが多かった(図9)。「先祖の供養(墓参り)をしていますか」では95.0%がイ.(している)、ロ.(しない)2.5%、ハ.(お墓がない)0.8%と答えた(図10)。「家に仏壇がありますか」は、30歳代が25.0%、40歳代は33.3%、50歳代は92.9%、60歳代は71.0%、70歳代は78.6%、80歳代は86.4%がイ.(ある)であった(図11)。

「畑又は家庭菜園の仕事をしますか」は20歳代、30歳代はロ.(ない)、40歳代はイ.(ある)16.7%、ロ.83.3%、50歳代はイ.42.9%、ロ.57.1%、60歳代はイ.45.2%、ロ.51.6%、70歳代はイ.40.5%、ロ.52.4%、80歳代は、イ、ロ共に40.9%、90歳代はないであった(図12)。「新聞は読みますか」は88.4%がイ.(毎日読む)であった(図13)。「回覧板は見ますか」は91.7%がイ.(見る)であった(図14)。

「隣近所の付き合いはありますか」は、30歳代、40歳代は共にロ.(あえば挨拶をする)100%、50歳代は、イ.(つき合いはない)7.1%、ロ.7.1%、ハ.(お互いの家を行き来する)21.4%、60歳代は、イ.3.2%、

ロ.80.6%、ハ.16.1%、70歳代はイ.2.4%、ロ.64.3%、ハ.23.8%、80歳代は、イ.13.6%、ロ.68.2%、ハ.4.5%、90歳代はロであった（図15）。「困ったとき相談できる隣人がいますか」68.6%がイ.(いる)、25.6%がロ.(いない)と答えた。30歳代では25.0%がいる、75.0%がいないと答えている。40歳代では50.0%の同数であった。50歳代はイ.78.6%、ロ.21.4%、60歳代は、イ.61.3%、35.5%、70歳代は、イ.73.8%、ロ.19.0%、80歳代は、イ.77.3%、ロ.13.6%、90歳代はイであった。50歳代から90歳代ではいると答えた対象者の方が多かった（図16）。「いざというときに助け合ったりできる隣人がいますか」では30歳代では25.0%がいる、75.0%がいないと答えている。40歳代では50.0%の同数であった。50歳代はイ.85.7%、ロ.14.3%、60歳代はイ.61.3%、ロ.29.0%、70歳代はイ.78.6%、ロ.14.3%、80歳代は、イ.81.8%、ロ.13.6%、90歳代はイであった。50歳代から90歳代ではいると答えた対象者が多かった（図17）。

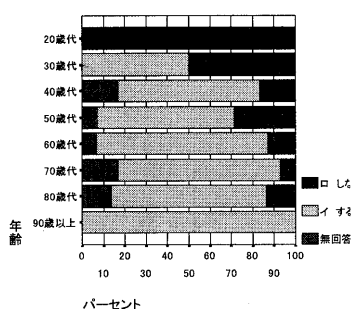


図 8 年代別

「自分の菩提寺にお参りに行くか」

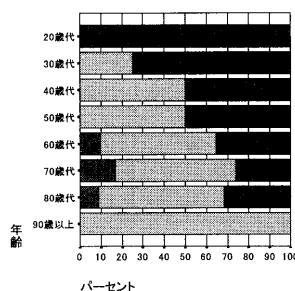


図 9 年代別

「菩提寺でお説教を聞いたことがあるか」

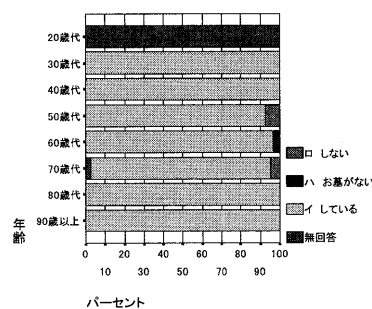


図 10 年代別

「先祖の供養(墓参り)をしているか」

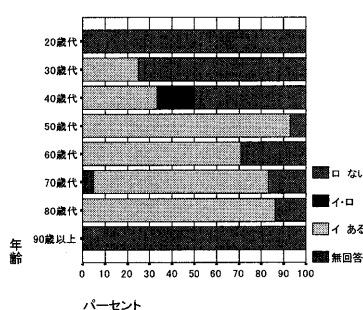


図 11 年代別

「家に仏壇があるか」

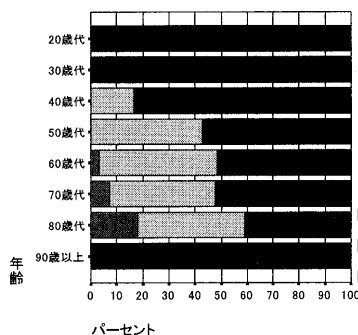


図 12 年代別

「畑又は家庭菜園の仕事があるか」

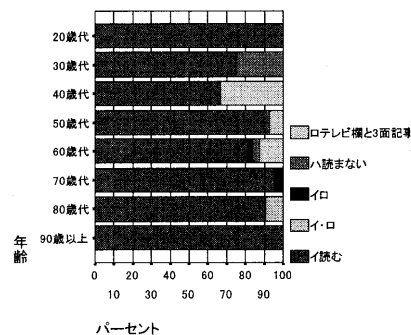


図 13 年代別

「新聞は読むか」

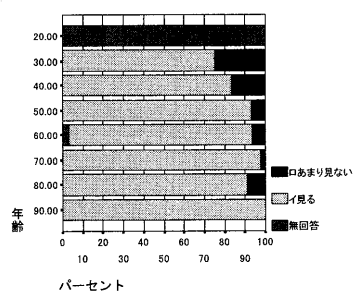


図 14 年代別「回覧板は見るか」

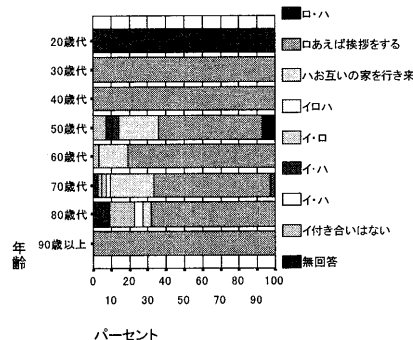


図 15 年代別「隣近所の付き合いはあるか」

老いのよそおい Vol. 2

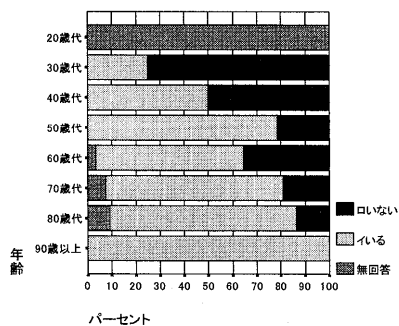


図 16 年代別

「困ったとき相談できる隣人がいるか」

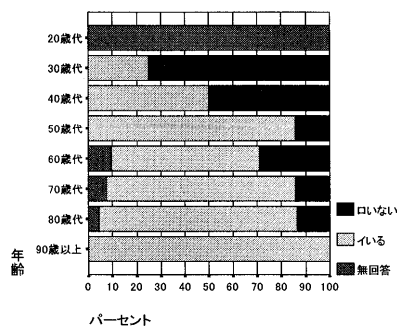


図 17 年代別

「いざというときに助け合ったりできる隣人がいるか」

まとめ

一身田に住んでいるということからも、ほぼ全員がお七夜を知っており、毎日ではなくても本山へお参りに行っていることがわかった。「これからもお七夜にお参りしますか」「お七夜のお説教をこれからも聞きに行きますか」は年代によってバラつきがみられ、今はお参りに行ったり、説教を聞いたりできていても、将来のことだけに先が読めないので確実に行くとは答えられない質問であったと考えられる。「お七夜でお説教を聞いたことがありますか」では30歳代から50歳代までは聞いたことがないと答えた対象者が多く、60歳代から80歳代は聞いたことがある対象者の方が多かった。「菩提寺でお説教を聞いたことがありますか」では20歳代、30歳代は聞いたことがないほうが多かった。40歳代、50歳代は同数であった。60歳代から90歳代では聞いたことがあるほうが多かった。この結果は、お七夜でお説教を聞いたことがある対象者が多い年代と重なる。60歳代は終戦の前後に生まれた世代であり、60歳以上の年代では、お七夜や菩提寺でお説教を聞くといった習慣があることがわかった。また40～50歳代の高度経済成長期に生まれた世代では、お七夜より、菩提寺でのお説教の方を聞く機会が多く、お七夜に行ってもお説教を聞くには至らない、菩提寺でならお説教を聞いている。20～30歳代では、どちらも聞いたことがないほうが多く、明らかに意識が変化してきている。

「自分の菩提寺にお参りに行きますか」は、40歳代から行くと回答した対象者の方が増える。「先祖の供養（墓参り）をしていますか」はどの年代層でも供養をしているが、供養とは関係なくとも菩提寺にお参りに行く機会が多くなるのは40歳代からである。「家に仏壇がありますか」は50歳代から増えることから、40～50歳代を境に上の年代では、親との同居世帯で先祖を供養している家族形態が多いと考えられる。家族形態は核家族化し、地域の伝統行事を継承していくことや家庭の中で老いを感じ取ることでも疎遠になってきた年代であり、20～30歳代の対象者がお七夜でも菩提寺でもお説教を聞いたことがないことの多さにもつながると考えらる。お説教の内容は、少しわかるを含めると63.6%と半数以上の対象者が理解している。「お七夜のお説教をこれからも聞きに行きますか」では、人に誘われたら行くもあわせると52.9%となった。お説教を聞くことは、60歳以上の年代の対象者の生活には溶け込んでおり、人の死や生を考える機会になっていると考えられる。「隣近所の付き合いはありますか」では、どの年代も、あえば挨拶をするが最も多かったが、50歳代から80歳代の年代では、お互いの家を行き来する人も少数ながらいることがわかった。「困ったとき相談できる隣人がいるか」では、30歳代では、い

ないと答えた人が半数を越え、40歳代は同数、50歳代から上の年代では、いると答えた人が半数を越えた。「いざというときに助け合ったりできる隣人がいるか」でも「困ったとき相談できる隣人がいるか」と同じ結果であった。このことから助け合うことは、相談事も含めてのことと考えられていることが伺える。これは、長年の付き合いが地域の中での助け合いの心を育てたと考える。また「畑又は家庭菜園の仕事があるか」では、40歳代までは、ほとんどの人がないと答えているのに対し、50歳代から80歳代では、あるとないがほぼ同数であり、この結果も50歳代から上の年代は、地域の中に根を下ろした生活を送っていることが垣間見てとれる。ほぼどの年代においても新聞を読んだり、回覧板を見ているので社会や地域についての情報収集はできている。しかし、全体的には40歳代という高度経済成長期の終わりの頃に生まれた世代を境に、若い世代は地域との関係が薄くなっていることも伺える。一身田に住む住民にも戦前戦後の生まれによって、地域の伝統行事に対しての意識や、家族形態、地域との関係は変化しているといえる。ものがありふれた豊かな時代に育った若い世代では、家庭や社会の中での老人から子への伝統の引き継ぎ、命の引き継ぎは絶たれようとしているのではないだろうか。

介護福祉士養成施設である本学でも高齢者福祉施設は、「終の棲家」と教えている。しかしながら、多くの施設では、利用者が亡くなられると終末期看取加算のもとでひっそりと霊安室に運ばれる。身近な人とともに霊安室の近くの出口より一部の職員に見送られるのである。共に生活をしていた人々に別れの営みもなく、夜と霧との世界が何の疑いもなく行われている。高齢者の「老いのよそおい」のありようを改めて問いかける必要性を強く感じる。社会福祉法人高田真善会・特別養護老人ホーム報徳園園長の千草は、子という字は、「了（人の終わり）に一（はじめ）を書いて子になる」と語ってくれた。まさに人の終わりを次の世代を担う担い手にその人の存在を紡ぐ援助が求められる。

註

- 1 広井良典、「ケアを問い直す―深層の時間―と高齢化社会―」、筑摩書房、p 56、1997年
- 2 広井良典、「ケア学 越境するケアへ」医学書院、pp134―181、2005年
- 3 中野正孝、「看護系統計調査入門」。真興交易㈱医書出版部、2006年
- 4 M・Eリッチモンド著 杉本一義訳、「人間の発見と形成」、人間福祉学研究会、1977年
- 5 ヴィクトール・E・フランクル著 池田香代子訳、「夜と霧と」、みすず書房、2002年
- 6 鷲田清一、「老いの空白」、㈱弘文堂、2007年
- 7 須原一秀、「自死という生き方」、㈱双葉社、2008年
- 8 薄井担子、「何がなぜ看護の情報なのか」、日本看護協会出版会、2003年
- 9 <http://www.senjuji.or.jp/> 真宗高田派本山 専修寺
- 10 <http://www1.mint.or.jp/~hosokawa/jinai/> 一身田寺内町